



1278
35

朝夷巡島記全傳第七編卷之五

村田

東都

松亭金水編輯

續輯第九 奸計彌艱語盤城酷吏

天誅直臻隱毒報

そと災厄の善政ふ勝き。夢怪の善行ふ勝き。是天地の定理。然
とどゆ時として。その寢ゆまく無く触り。朝夷うち忠直も。一点の
過ぎたり。浮雲天日と覆かふ。一霎時ちの明と暗まぐれあり。再説當
下阿武隈大夫。時直がとぞの果ふと俟て。一坐の人と祝ひ。問ふと
うち笑ひ。傳えき。朝夷大人へ器量骨柄衆ふ勝き。又氣逞き。忠
勇仁義の人なりと世あい。這回始めて見えて。ひよふも今尊ふ
差り。天晴る。武士よりと心ふ感ト漫ふ恐そ。思ひ。しもこの一件の

とふ於て吾こそぞ。愚痴の者ざも忽地ふ心劣きのせまこと。まご青春を
在をまよひ。酒呑のうふ戯言と宣ふも妨あじ。然ど領ふ従ふざること。
對身不足らぬ婦女と縛わ。責めまことに大人も。將そもとも威嚴ふ惶て。
胸のこ脹ら一塙（う）へせん。丈立ふ忍び難くふ。吾へ無く假て害さんと
あつるみど。まご是般をよひ铁肩（やさぎ）。妹ありとの難顎難向。在下多口と譲さん。
次捨らきぬ所なり。そな無く直とふ。せううんと宣へど。どうやらても見
タク。铁肩矢藤五を賊の魁首（けいしゅ）が修羅五郎（ごろう）一二の者と。既ふみ
地と逐電う。往方ちとざるその時ふも。あ國（くに）へ元より東山東海。す他
諸多小人象り。嚴ち探一索わよと。觸示されうる罪犯人。み妹よる處
女よ。何の故ふう家小養ひ。且時直の側室とぞき。是より都て迹形失ひ。
作と言ふらむを。知りまく。思ふふ聲きふは心ふ。従ぐれども傳めらま。

其索脱て今あで。明く地不辯と言ふふたり。深く憎そ重罪う。矢藤五
妹とりひ。且きもくづ見えもなき。空言えふうち文て。罪きひりん心ふ。升
ひ大人ふも似合へ。比怯の举动傍痛し。今日檢断のそな場所。知縣
と始も農夫們と。集會て仁義の道と説き。言下小諸人と服させへ。实不
允人の及ぶぬ所。う得ひ大人と称う間ゆ。婦人と侮る言と誣て。そなオ
の罪と遁れんと。計抜きよひと稼し。こきり仁義の大道みや。さうのとくに何
とののんと飽まで嘲け言葉の端時直扇と半開きて。阿武隈（あぶくま）
ねが頗りけれ。猶こまこふても双びうれ。明智の人とのんみ。孰う明智でなれ
りののんと。飽まで嘲け言葉の端時直扇と半開きて。阿武隈（あぶくま）
かあて。あく醉愚う。但一まこと物狂ひふう覺束う。身の分際も辨へ。貴
人へ對へて无礼の口綻其處速ふ退く。朝夷大人と云ふをも。何と云ふ。嫌倉

よりのゆき使。則君の名代されば。任意道理ふねばる。とありとても吾くが詰
せむ責べきもあらず。凡そ下うて上と学ばず。和漢古今の通義り。此頃殘余の
相識仁より。吾ふ書翰と贈て越する。その文面と聞きよ。君は只管放逸ふ。
募るをひして色と愛。安達景盛と三河へ下り。お愛妾うる筆鶴と奪ひて
左右ふ侍ら。昼夜遊宴做れ。今ふもあれ景盛。歸參うるびのうる
べき。と心あら入々汗と握らぬりのもうじ。実ふ君臣の貴族ふかひて。理ゆ
まこと勝ざる所あり。既ふ三河の草賊と。一戦不切平らげ。日向を凱陣せり
處ふ。妾の居ねば景盛。お家僕とせあこを糺す。ふ世の風ふかひ如此。
タリと。やて景盛大ふ怒。と。相恩の君うとも。人倫ふ闇うるに。舉動弥
相違なきふ於て。怨と奉らんと憤る。その由領ふやえ。君ゆふ添く嫉
ませうひ。且近臣等うる。勧めふよ。景盛追討をべきの結構。景盛彼より
そゆて。尼山臺の山館へ参る。只管愁訴を。テレしう。尼君憐きと思
ふ。安達が邸へまよせり。以使とりて柳營へ安達は父祖より旧功あり。
然ふ何の罪ある。处のきを追討を。結構きふ。意と得を。速ふ
止す。倘き強て行んと。すば吾身と射てその後ふ計。もう人と嚴き。
尼山臺の山館ふう。柳營ふり。直ふ軍旅と疎う。若尼山臺みうせば。
あよよれ珍事の出来べ。实ふ浅増き世間。と。具ふ縁ゆ越へる。朝夷
との称り。そゆ臣。且君の名代。うき。支那ふ倣ひ。人道ふ。關うる。と
言ふ。吾こそても。豫倉殿の同ド内ふあり。遠臣。親。うる。と。
古風と守る。今時の流行。あひと疎う。今らの大人が人道ふ。關うる。と
深く責む。行ひ。弁一吾君と。責ふ似て。善う。されば。惣のそん。う。口と
囃す。あらこそ倍ら。然ふいあすや。岩潤半瀬。然ふいあすぞや。阿武隈

と。左右ふとすせ朝東と。嘲と褊とる言葉の端と。性急なまぐ忿びゆき。
 その口と引裂くと。腸えも沸かし。鬚髮送り。白眼つめ。妻時退
 きて是と思ふ。涙を酒與ふ衆じよとも。貴絶する車の差別ひあらべ。然
 ると斯まで辱うあひうへ。嵐の夕うそ虎の鬚と。舐みふ等。一举動うそと。直
 怒と緯と起き。お虚ふ衆て人と集会。吾と害して坐の喧嘩。然も
 あがむ醉狂ひて。人と過ゆるとあらふ。餘義う斯のぶれど。あれぬると
 言ふ。準備とも。まこと。鬼ふり角も。是はこそ。吾身一己のとて。任意死
 まともそれまでう。今時直ざりと。聽ふ。安達が妾と奪ひ捕る。君寵愛を
 做しよ。安達其う一等及び恨み。而と嫉まう。既ふ軍勢をうむ。渠
 と誅せんとの計らひ。全くそきとが虛言う。言語ふ絶う。一举动。世を
 も澆ふたう。假令いふ。垣間見ゆ。君の愛きせうとも。近づこれと
 強て諫め。思ひ駐まつて。恐るふ君の悪と助け。天下ふ汚名と流す。是
 中野以下の小人どう。詭辯と似ての計らひあん。嗟痛ちきとうと。此と從彼と
 思ふ。ふつて。人心素と右幕下の創業あり。孫倉の竟ふ衰へん。欲きて
 猶餘す。只管歎息せよ。怒氣りまく。撓むりのう。思へば渠等が元
 徒の難言。あのまふや。釋さんと。直ふ此方ふうち對ひ。繁城姓阿武隈大夫。无礼
 きことよりのう。折とを明智。何者う評し。明智ハ遠く吾及ばぬと。
 人の妻妾と誑う。義と闇どれのゆひう。然うと嫡婦ヶ逐形。妾の舌
 頭と誠と。詞の中ふ吾と識。柳營安達が妾と奪ふ。虚実いまと吾知
 らねど。そのゆとりて。朝の条を以て奇怪う。汝も多くの苞苴と受。美田
 と以て瘠地ふ換へ。夫う。既ふ事起きて。や擾乱の端と聞く。もの非道う。
 举动あま。後日の難と慮う。一点きこととあり。頬ふ嫡婦と語らひ

吾よりく非爰の族ふ陥さんと。言語ふ絶る白痴どもうる汝をいふ争
ひて。吾と陥さんと欲まるとも。吾既ふ両眼あつて。その面魂の不良と知る。
既ふ両の耳あまざ。言下ふことと怒らせ。その虚と奸の計浅か察しぬ。
さまで汝をの姫婦。俱ふ搦めて持て飯。公向所於てその是非の公裁と
請んと勿論さうりのみ。堅城へ豫て北條めの三きれりのふ變り。かのよ
せば是とわて往き。罪ふ陥さる執權のことを悔とかりやら。吾直道と好む
とのども。執權の君の外戚。殊ふ往昔右幕府の。時として大功あり。用力も重
き其人ふ恥と闇して何ふうせん。殊ふ在下の君の脳近人と正すの職ふあらば。這回へ
餘えき君令ふ。の檢断へ國らへど。支ふ済バ。他まと何どう穿ち正
あそ。こぞ智不誇るのふあらん。元来吾の性急ゆく。聊非道と放それど。おふ
抱をだしてきぬ。忍びがく思ふる。況てこの身と陥りまんと。計りまゝの
悔ちき。身と空もりしてあふきあへねど。這じ執權の好意き。汝達これとく
心ゆて。一旦の身の誤と懲悔してこそ不仕よ。されば昨今心中ふ狹め。念も解て
双方平安ふ至るべ。只ちと這回の君令の。使うちと顧み。性と曲て奉事と
虞る。实ふ汝達が僥倖き。と思ふ。似ぬ會釈ふ。御含摧けて今更ふ心の
巧と粗鄙ひ。如何にせんと思へども。元もと已ぞ意趣ある。湯島密使の故
とて。廻らを計畧り。無事ふ治めて飯らへて。密使の詮もきにの。のう。
後ふりうる崇マウム。と思へば猶も思案と疑へ。時直左右の肘と張。田園と頌
ちくろると。聊覚えゆき。誰うちんオふ告げ。そん本人き。聴ま欲。文
のこもと。おまえ。一条。吾ミダ初。所ふあ。然ふ。一旦の誤と。懲悔せよ。い
えしまれ。何の所謂。ほや。その儀へ心得が。在下。彼令執權の員。肩うすの。きりと。

朝夷怒て磐城の

黨を塵小さ



罪あくび正へ。ひうで遠慮ふ及ぎきことひりや聲とて信と猶々。今の如くふりもれても口と喫え物りぬ。朝夷刀称のひそよど見る。ふと虚云と構え。吾身と危ふう。倘然らむ其處へ出で。在の隨意に頗る言。但はその威ふ畏も。やと駿眼をまぶす。今秋もあくぞ朝夷。傍近く小膝立直し。柳接と。難し。頗忽地秋。雨と帶る風情ふり。昨夜うのちん身が非道。をや盡くひれ。今更再び何とうのを。然うと女と侮ふ。雪とも墨とのひ消。妾のうへ刀称ふまで。あよきに計校せ。うんどう。惡名負してその身の辱。覆りんとする。ちん身が心底黒うとも比咎とも。よ。術ちぬ寐徒者。それでも猛者元武丈夫。言せふのうふ証拠ひきとも。ま。老毛ひあひく。佯狂して遁まん。うつむとり遁さん。や。在のうふ頃りひて。忽地ふ。その非を知りて陳ぐるとう。実と告て死うんとする。その心底と。まく感じて人の將死うんと。言と善と称へる。その口どふもまき乾く。衣裡を以て吾と罵る。這面ひらりく。許へが。尾篋みせそと怒ふ。壇を堅めて左みの小髪と。茂矢と。おバニ言といを。嗟やと叫びて其處へ倒る。これ祝て時直阿武隈太夫。岩瀬芋瀬一般ふ。破券。狼藉。そと刀ふみと。膝立直せば。時直。後方と向きて者共未きと。りふうち早く應と回答て。豫て儲け。一味の諸士。聞く間違と隔紙と。一度不ちと蹴抜きて。むしと朝夷。前後左右ふ衝立。蒐。去末縛ゆの繩かれと。喉をりく詰寄る。朝夷。偕とも祝ひ。吾ふ何ぞの咎あつて。縛あると。す。奇怪至極頃。本

朝唐七編 卷五

らまく辛き目えせんと鑼ふ介一声えり揚て四言うきふ怖きやあけん。さ
得不左右うき寄属を。坐め下時直立かく。旁などて猶豫を。倘惶しく
僉うち退き。比怯うきと廻まを言葉。まご畢らぬふ一人が。はく傍て朝
夷の右の腕と丁と把る。朝夷頭とう拂ひ。突もを巻ふ突き膚。此と得
志して倒き伏を。繞て蒐ふと膝ふ引敷き。まご腕と揪ふ。身り足せん。檣
と拋き並べる。折敷の上ふ平張伏して。大蛇ゆきる浅盤の中ふ。春蟲きく
そる谷へ。鯉ふあうねど生作ア。迹く走ふとまき拋ちし。甲居ふ頭と打度て。
そのまゝ併及りのもの。了得の大勢一容ふ。忍ますて傍へ傍付の志。朝夷の從
僕等。ころ物音をうづけて。何事うきやとあき。間の隔紙用んとするふ豫て
期あううとされば。後へ銓柱緊とて。推ども曳ども動ねば。奚の方へ入べき
やうう。と置畠こと罵ア。その容と窺ふの。再説般城時。直に思ふ不倍。る
朝夷が勇力烈ちよ豫て。一も荷擔人ふと語らひむたる。部下の甲乙七八人
拋除らまと教ひ付されて。適息ありのとす。蟲くのとて物えひ得を半い
死へうろづくられ。とまびて心中急地ふ。五分の怖きと生ド。懃うきと仕少ヒ。そ
一家の浮沈の期ふ。究まううと思ふの。休止きふあうれば。阿武隈以下
のりのどもふ。信と腋眼をそりのともいだ。佩る刀とすゝと引抜き。朝夷目がけ
切てかる。心得うと朝夷も。同く刀と拔駆。汝校者何等の故ふ。縛と巧ミ吾を
一と。死地ふ陥んとす。ぞ。遮莫ひもま。一個の猛者と称らま。と。と東ねく
こと俟ん。将細首うち落と。修羅の巷の導きせん。ど。とすう早く發矢と研る。
時直きと受流し。友を刀ふ替力といひて。真甲未塵とね。太刀と。右へ走ら。朝
夷がひとす。伸て時直が左の膳と辟刀う。當下阿武隈岩剝芋漬。もう一容ふ太
刀ねき。弱羽ちて。朝夷が前後左右。透もあせん研てかる。と。義秀更ふと。もせ。

朝夷七編卷五

身と逡巡て大喝一声。仇考が耳の根貫ぬ、むら主。宛も奔雷の頭上に墜て。
瓦屋も毀る。斗まうれば。足も麻木。脇縮え。五體ふ汗と流す。敢て
又向ふ術と知りだ。朝夷太刀と把直と。二打三打をうち及キ。阿武隈岩渕
芊漸等。首ハ宙を落してげ。どの時。まど時。走へ死もやす脇の傷うち。浪
とて滴る血汐ふ苦。うごきと祝す。もと計策のゆきと悔すりのう。此
期ふうりても。猶令下の惜まえ。斯て一あぐ。朝夷が頬て首と落さらん。死一
う真似とする小岩ど。俯て疼きと堪へ息うき如く。做そり。朝夷も一
勢ふ。仇考と刺苗て四きとつるふ。今ハ火の消する如く。何處と人の氣勢も。也
然るふても。僕等。何方ふ何と做して居らん。の物音の噪ぐきふ。出来ねを
不測う。と次の間。うきとその次の間。其餘間。毎と窺ひ。不ふ。彼處ふ。畠。声
せえう。あきんかうと従て。不ふ。果たて隔紙の後へ。塙柱と堅く。頬して在と
止。しん上とのと案ト。不ふ。奉事ふ在して。歎ぐ。と。異口同音ふ。ひければ。朝夷い
うち。点頭仔細あつて。この家の主人。城四郎。時直と始めて。阿武隈太夫。さと
岩渕作理及び。芋田莖六。その他。吾考の名と。まかず。校者。不意ふ。と對ひ
き。ふ因。或ひ。抛つけ切伏せ。半生半死の者もあり。まこと。死ふ。ゆゑく
うだ。吾既ふ。諍論と。絆をもと。使節ふ。ちか。騒擾ふ。及び。と。鎌倉どの人
對し。言解術も。みだりのう。辯のあふ。及ばず。止事と。得する。されど。も
分解ふ。腹をき。切らんと。覺悟せ。まこと。熟と。おひく。もふ。吾考の所で。今と
隕さば。酒呑ふ。衆ト。假初の喧嘩うりと。入ひり。然らん。時の君令の重き。

と爲辯へて抨き私の怒徹とりつて。他と殺一の身死を不忠不孝の徒ありとて。家尊の大人が威とされ落さん。實ふ不孝の所為もとば。一切と金と惜むふあらねど。先簾食へてち飯と件の事と問注所へ詳ふ訴へど。公裁と作だまし。そとふ就ては彼處うる。息あき者へ更ふ要う。任意頭へお毀。腕へ折まうとも。息ある者と悉く持て飯らんと思ふう。你等捕縛の準備もと。領こ来まことひとて。心渴まると雜人等。荷物と纏げ一麻縛など解て各ふみ縕。主の後方ふり副て。彼處へ到るふ思ひき。赤ふ塗る死骸え。かく夥敷あんぐ。あふ於て雜人等へ。祝ふれも暗と身も戰慄れて。左右きへ進みゆき。朝夷後方と祝ひて。要ふ立ぎる雜人等。疾索とあふ出せと。自ら把て元端う。まご息絶で蟲くいのと。三四個引傳し。左京兩個とひつ提て。下僕等ふ遙与つ。傍時直ひふと祝ふ渠等の始也。怖

あきふ。虚死すて居あじが。膀の癪の疼。あ瘡へぞ。渾オの血没残りド。思ふ半
りふ滴モ流。果少の大腸小腸。かの癪口うり出るふぞ。りりく疼痛不忿び
ひを。早くも夢の心地ふり。吾ふもやぞ。叫びて在。この時終不息絶う。
これふ因て朝夷ハ渠う死骸とうち返し。嗟過てを。這奴らを証拠とす乞第
タ。殺しきる残念。舞ひいふと立候コスカ。強くちまそを絶き。
夫う久ちうあまふ。做一を死言が凍のう。五體ハ冷て今更不穢生き容
あを。立ち脆き奴る。い啖きみう。立て。ぞと雜人不荷物と負せ又膚と
曳せり。既不母城が門のまく。未う。さう。後う。兵弗と弦音高く。一箭の
征矢飛来。朝夷。轡と。楓と拂ひて餘る矢。門の柱へ衝立。破。御
り。者よと祝ひく。その教をも定ふ。彼處うんと立す。例の竹
根棒と右手ふ把。取て返して。草駄天の荒涼如く。踊る上マ。えとばの

朝夷七編 卷五

矢と羽損どて奥へ逃る者の方。朝夷透きだ逐ひて度の船城の即をう。主と討せを當の敵と討んと覗着え健の举动りを勝負を得まとべし頃に返せとひりとど彼者ハ猶面もうとぞ。要すりう所へ逃る。朝夷四下され配も何方までもと逐蒐めまぐれを遁えき道なり。その暇小矢うち番ひ再び兵と發てども。這田心急まる。空ちく翥て傍不飛ぶ。朝夷をまづ顔とす。磐城が家の郎黨とひ思ひの外う湯島より汝ハ先須佐くまき。今下されども執權の家臣と手下小戮をふ忍びて。生て逾すせ。再生の恩と報せんとの爲み矢と射懸あう執念くも。そまと恨むる心ふう。その釈せんまといふれば。遙々此處へ來アリ。是も深き故由あらん。と問れて一句の答へも。腰不佩する刀をひきぬきり。引抜物ともいひて切て蒐る。朝夷例の鉄撮棒と把直とを參んとすれば。四面ハ狭一門居り。左右不聞えて自在とゆゑ。這ハ巧惜と云ふ棒と。拵捨て刀と抜き渡す。金を丁と。五合六合おわひをぢ。朝夷ハいふ不もあらず。渠と生まざり。搦めんと會釈不ど。湯島はこそ一生懸命ふ腕痺るまをうち揮る峰。聊々猶豫のうりざれ。搦めんとせ。此方の身よ過わんと思ひ。威勢猛で透と殺。湯島日をや受畠まこと。大力金刃の朝夷が。うち込ひ太刀ハ支えず。真甲未塵ふうち碎く。夢とり立を倒す。あふ於て朝夷ハいきう故ふて湯島のみ。家ふ藏き。のうん。夫まへ量マ知まねば。まごろ他不も忍び居て。不意と騒んとすりのあらや。と夫うち間毎どうち巡る。或ひ家の迫うぐと残り。き點見あらふ。奴僕婢女等ハとくとく。向ふ逃散みて一個ざむ。人の居らねば心ハ安う。嗟然う。這田の詮後。証拠とくまべた時直及び。湯島磐石を阿武隈矣。食死をうることを遠憾あま。去来こととをきさんと。再び外の方へも出る。秋の夜う。海長けきど。ちや東雲となづけ。朝夷ハ下僕をと。庖厨の方



へ遣へて。すなはちふ霄ふ仕立する。飯もあり菜もある。火も水も消て湯茶のみ。されど腹と肥との要少ひ足りぬ。將此方へ持て来よと。残マテ運木をつ。主従あみて十分ふ。うち啖ひなどきるふどぶ。おや晃と日ひさす昇る。時刻ひうとみ所と。徐ことえ去マケリ。

續輯第十

義漢道路遭災厄
忠膽貫主僕再會

于粵ア岡田冠者トモアミンヤが遺腹コナガゼの旅店の主猛八と腰越獸六郎の両名ハ属下の者俱ふ十人可也。荒川縁の家とある。夜と日ふ嗣ツヅクで急ぎあう。其道ども近ちかく走まわ思ひの外不日と重ね漸くふと陸奥アキ。南部の境境ふ到いたる。あくまで人の風かぜと聽きふ。あの四五日前鎌倉の檢断使と朝夷の秀秀ヒカルと申り入いふ。通らまこうといふ不ぞれ。斯カより相違たがひ。また其案内そなへに知ら

志とりど。岩城山イワシマヤ弘前ひろさきより。南の方と交かかる。彼處と併て往ゆんのと。磐城いわきの山と目的めとて。只管道と急ぎける。

因あらわふり入い陸奥アキ。東山道の大國おほくにとて。往昔むかし三十六郡さんじゅうぐん。後ご小五十四郡こいじゅうよんぐん。不領ふりょう。殊ことふその境廣ひろ。王化の達いたれふ。元月天皇和洞わのらう五年。陸奥越後いわきえごと裂合わかれて。出羽いりわのふと故筆ふるひむとく。出羽いりわ平十一郡ひらじゅういちぐん。後ご由利ゆりの郡と加くわへ。今いまの負十二小字こぢ。國高八十七万石餘よ。但ただし諸書よしょと按あわせるふ。悉みなく異同いちうあり。陸奥いわき大管だいかん五十四郡いそご。平二郡ひらにぐん。東西六十日大々上國じょうこく。田數四万二千五十七丁とう。知行高百七十二万五千石ご。書ふ曰いわく百九十二万石ご。また百八十七万石ご。と。いまと孰だれ是これと知し。本文磐城いわきと称めいす。弘前ひろさきの南の磐城山いわきやま。今安壽姫あんじゅひめの古跡こせきあり。而現あらわし。崇たかめ祀まつ。江戸えど弘前ひろさき百半里ひゃんり。その南みなみある。と。行程こうけいのまご詳まこと。

タタタ。磐城平と称するのへ磐前郡の内ふあり。江戸より五十五里と云。
磐城山ふ大ふ殊う。その地名紛ひ安きと云。童蒙家のあふ漸うの
懲而ゆくと数日ふて。大鷦とり所不到る。あのもとすべて山家ふと家
居ど見る。柱う。浦曲の家と摸一弓繪小煙豆をみびく塩屋の如く。
左右の檐の地ふ著て。棟たうそ高うける。かの神武の詔ふ賤民の穴ふ接
す。巢ふ栖と宣ひ一も。今更よりひ出らる。景勢ふ人といと珍らも立うりて。
家の内とく。年十五六の未通女居う。色は黒ふて染の敷紙ふ
りのふ似う。白き麻の衣とみう。その裾殊ふ短うして。大き膝と頭へ
まく。異形う。とりくぐふを。古へたり蝦夷と称。父子夫婦の差別う。男
女所と同あう。と舊き書ふも記されう。正小是等のとみや。とうち祝う
行ふど。さて五六里と過ぬま。筋の大河あふ。是より先ハ磐城と云。此处
をば。筒の山家と違ひて。人物ハ陋しけども。蝦夷と唱う。まであひえまき。
只言語ハ自鼻ふからま。聽うに難き。多う。き入ひ辛にして。此处までも
未うりけ。又彼四郎時直。館え程の近うべ。と大河のきの茶店ふ
憩ひ。そきふ容子と尋ねゆ。ふ更ふかう。者も。日影ハ早く。西没落。
申刻比とも。覺へん。との大河をやう渡らん。但へ此處をふ宿すを索れて。
翌こそ尋ね往ゆ。と。の便宜と計る。不然。忽然うて。前面ふ。凡人数五六干。
群ふと。出来。むり。利鎌竹陰う。其外得物と引提て。集ひ来ふ。傳
えき。農夫一揆とり。のゆ。覺束う。と。祝居う。渠等が此方と信と祝て。
腰う。各ふ竹螺と。出と。まと吹立。その音宛然凄う。く。吹ふ折り遙
樹の間ふ粲然幡幟の影え見え曳と。聞と揚々押素。人数。幾百人。ふを
あふ。猛父及獸六郎。至ふ眼と眼とえあり。這へ何事の出来。ふ。よふ這回磐

城の山論。その檢断は朝東大人の来るをうと聽うる。その檢断のとく就て斯
の如くの騒ぎふ及ばず。丈もまことかくらむ。若然らんが、朝東大人の身の存
亡ふ羅ぐべ。斯て猶豫もううべ。兎ふも角ふもみ河と渡りて后ふ次方
と聽ふ。あふ差ひぬとうべ。一臂の膂力と助くべ。と頗ふ一決みて岸をふ到里。
船やあつとえきて折る。件の人数をも、迎付て口とふほりす。其處うる奴
らは謙倉訛とあふもるが、朝東が方入ふてあらねべ。若然もわべ逸てふ擣
ゆて曳と知縣の指揮。其處動くと詰す。猛八獸六兩個のりのいすと
騒げり氣色うき。いふも吾と朝東大人ふ由縁ありのふが。さて彼人の迹を
逐ふ。今こう所へ来りのいまと面會もつまねば。その釈ざむかうとうき。何
故小彼人の方入りと吾等と罵る。夫等のこと逐ふ。語らずて後ふ掘めうとも。
知縣へ曳くもあべきうり。嗟騒こちき農支們去来お釈と頗りべと詰はまく
口ふ。ひづき筋と具ふるねど。燃城の守護も時直め。其外眼代阿武隈
大丈知縣の岩渕芋田まで。まよ悉く研倒し。夜ふ紛まで朝東。何方とも
き逃去う。然まうがのきの守護眼代も。まよせ捨うが。吾们と促
立て行方と探一掘めて出せよと。その分付は嚴う。汝等由縁の者とくせう
そな併み通一が。ひまご面會もせずとつとも、开て分解とさせんや。頗る
き然もうべ。逸て縛れて曳りてゆんと各々小得物とうち揮て競ひ蒐れべ
てあら。ひととくも卒爾もせそ。你達も粗淺をめん。朝東大人へ信義の
士き。故うく夫等の人と殺して、あ地と立退くことを做さん。是ト仔細のみ
うぞや。你達精をき釈ざまち。任意守護眼代の下知りありとも罪り
き。途行人と搦んと鳥游あるふか限もあり。其處除て通ふべ。からくとも
猶立塞き。通きトとく是非もう。吾ととく一個の壯夫など阿容こと。你

達ふ。搦めりとて曳きんや。元未仇も憾もより。你達と死と争ふも益
とするべ絕さう。お勢ひの自然が因て銘の身と過つ心ある人のまな所悟
よそ道と聞けよう。と縛と好むの心ありとば面と和らげ説らぐ。農夫们
へ没入きと噪ぎ立てる僻處で。中から年若き者ども。そぞらの言葉と耳から
うけを賢くおひ遁ませ。避んとするとも道きんや。兎角の言と費さん。打
倒して搦めよと。僉一容おひひ四言と。矢庭おきてからふ。這は少狀う。素未然
らば逸て汝等が首切並へ道と聞きて通らんの。者共準備と後方お控へ。
属下のりの不言ひ。猛ハ其处へ歸る。と。獸六郎ハ却隔限すもあらぬ
彼大勢。豈よ如何お猛くとも。僉切拂ひて通らんと。タクス及びどく。
且属下ふ過あん。若ド今面言葉と竭。宥めてうと通らん。ふりよ間に
あゞぞ農夫们既不間近く進み。お倒さんと失め不ぞ。言葉と以て説
切らくと。誓ひ廻る。述ふ続き。数多の人も。喧嘩とり。声高一途。
ゆきせまで聲てかる。獸六郎も属下の者も。這ハ大事ふ及ひう。斯ううと各
ふ腰の刀と引めき。群ぐる中へ割て入る。誰と敵とも定めり。滅多お不薙ぎ
あり。深瘡と負へあけども。或ひ肩先腕首髪所きり。至て癪とうけ。
恐れを退くのもあり。まこと此容不も見懲せだ。と。引捉て手柄ふせんと。
蒐えり。ものあり。渾物で刀とうけ。曲つまこと竹陰と。伸て突からうといと
急り。こ不於く。猛ハ及。獸六郎こそ豫ての練。小渾才と傷つて。無れど。
遺まる者。腕の力。あれど試合お馴まし。或ひ。肚肩先。ど突破り。と痛か
弱。其處へ平張りの。農夫们じり。勇も。ぞ蒐えりの威勢。侮りがく
え。けど。猛ハ。不走鳥の如く。翔て巡る。而倚来り。と。所倒をと五人可。

朝東七編 卷五

獸六郎もあと先途と督力を充め切立。威勢持小奮然れ。農夫们
辟易そ。霎時後方へ引下。因に聊解。且。兩個も一息りと吻。傍と祝
ふ。不屬徒がひ。甲乙のく深痛と負て。兩三人を死せ。もつて。斯て。これも特
え。幸未今一般目ふ物足せ。透と窺ひあらの場と去え。渠等不便の景
勢も。とど。是と救かの暇。後ふこそ再詮方ある。繞きうと猛ハ。見えかる
やど。獸六郎も心済すと属添を。まよとまんと早ひ。足元農夫们ハ。それ
遁す。とまく群と押取扱。猛ハ。頻々不所拂ふ。太刀風尖く近傍渾ぬ間
と候ひ。町斗走。向ひふまき二族。まと捕へよと荒年の人数競ひか。と
とも。だ。進入。先ふ。三。两个不傷つ。是。又。門と飛逡巡
中と。開け。浮うち。忘。と。獸六郎も諸共ふ。太刀どう。揮。晃。威。と
あと駆通る。有斯。と。右。左。の方。川。副。て。族の人馬遙不突。若。兩個
ち作。ま。是。と。ふ。這。農夫の。体。ふ。あ。真。先。不。懾。と。そ。人数。九。四。五
十。人。み跡。少。弓矢鉢。など。携。え。る。の。三十。人。頭。ふ。あ。ん。騎。馬。一。人。の
餘の。雜。人。此。彼。合。せ。そ。百。人。可。と。え。ぬ。土。煙。り。と。立。て。馳。未。る。是。え
翁。ふ。農。夫。考。が。あ。所。の。守。護。眼。代。と。言。あ。り。し。ハ。と。の。こ。あ。ん。先。刻。う。戦
ク。ひ。勞。と。咽。乾。けど。湯。水。と。渴。を。腹。空。一。け。と。飯。と。喰。り。ぞ。不。と。筋
力。弱。と。と。心。も。と。早。と。も。あ。大。敵。ふ。あ。ら。ん。や。然。ア。と。い。ど。不。憶。む。兵
書。ふ。所。謂。重。地。ふ。入。て。如。何。と。も。旌。方。す。が。勢。近。く。傍。く。べ。吾。等。一。切。辨
ま。ね。う。と。ひ。解。て。赦。ま。え。る。安。穩。ふ。え。退。べ。倘。そ。と。あ。も。赦。す。と。あ。
覺悟。究。る。一。景。勢。あ。て。泰。然。う。て。ひ。け。ま。ぐ。獸。六。郎。は。笑。あ。る。貴。所。の。言。葉
勇。ま。く。勇。士。の。誰。も。斯。こ。そ。あ。る。若。と。ど。在。下。が。思。ふ。あ。い。所。謂。一。旦。の。死。と。怪

朝夷七編卷五

猛八獸六郎因らば
朝夷小會合ま



月夜二月之三

早八

んべく生と護るの難き我忘失へ。計畧うまふ似て。いくふといふ吾お。此處こ來
しの朝東大人あさひとう。危急と告てその機きふくらむ。一臂いりと援けん為のミテ。然ふ
親くそること。ゆきどりとも既いふ変わ。船城以下と斬害ざんがして。え退しりぞくハ
災厄さいやの大あらりのゆて。大人の余全よぜん。否いなどりまごむか。敢あく吾おもあく
死しき。是俗これぞより人れ物死め。自他の益ますふき。骸ほと野徑やせ不棄するの。忠ちゆうふも
ああいぞ矣えふもああいぞ矣え。大太夫だいたゆの所為せいと言え。銀雞ぎんけいと嘗辛苦さわぐと凌さわぐ。
一旦いつの志しと立たてんとこそ原心はらじんにま欲ほけ。然しかどとりども斯このの如ごく。圍いはそと吾おを攻こう
ふ至いたまま。いづふもよそ遁とおきん術じゆと討うの外ほか。ああいぞう。時ときもや黄昏こうはんふ及およねれ。ば
まづこの河かをふ茂しげてゆる。芦茅あしらの中なかふ身みと潛ひそむ。身みと身みと潜ひそむ。身みと身みと潜ひそむ。
量りょうをと遁とおきん。羅らききとやひざ。倘まことに其處そこふ人ひとありと。曉ありて千種せんしゆと搔分さわげ。
索さめりううば徐ゆきと。岸きしを不臻ふしんと。時宜ときふたり。縛急つかまく。水中みずへ潜ひそり入いて。ゆ
身みと遁とおきん。貴兄きけい。いづふ思おもひく。とりふ猛八もうや。農夫のうぶと對たいする
ああふ死死うんうん血け氣きの勇ゆう。りふも自他じほかの益ますふき。然しからば人ひと數すうの近ちかづくぬ間ま。先
片かた陥おちへ懲こころまえと。跡あとがくふ茂しげ。河かの芦あしらと搔かく。潛ひそり入いると二十步
をう。斯こので敵のぞの来るとも争あらそう入いの在あらそび。這は屈竟くくわいの隱ひ處しゆ。と
と居ゐて候まつ。間まふ。やかの一族しやく。近ちかづきう。獸六郎じゅくろ。頭かしらと舉あて。芦あしらの茂しげあ
透とお間まう。そち行裝けいそうと。祝のぶ。這は思おもひき。騎馬きば。朝東あさひとう。美秀みしゆ。いん
ともあふ於おて言葉ことば遠とおち。猛八もうや。示あ。赤来あかま。従ともて對面たいめんせんと。ひゞ草くさと
左右さゆう分わけて。急いそき立たつさんと做つく。かの隊たいの人ひと。物音ものごゑ。敵のぞ。も思おもひ
ともあけん。眸まなこと。むけ弓ゆきゆう。把車ぱしゃ。信のぶと叢くさと白眼しらまなこ。人のゆうと。う景勢けいせい。ふ
獸六郎じゅくろ。ひと揚あ。各おのう。を麻忽まつこあ。吾お。害心めいしんあるゆう。も。朝東あさひとう。大
人ひと。見み參さん。と。歲干さいかんの苦銀くぎんと。せ。り。と。先隊せんたいの雜人ざつじん。耳みみ。も。也よ

朝夷七編卷五

近傍まふ打倒えんと矢めくあきる射林まきんと矢どうち番ひ弓ひ
矢のあり。兩個はりよく大音あげて局の如くふほもる。とお美秀是
とゆあへき。客子あらげと燈と踏たう。鞍壺不衝立あぐ。かの叢うる人と殺
ふねや行黒て定うるねど。獸六郎ふうく似う。然ハあきども此をく渠の
未づき苦もう。這い僻目ふであるげど渠は僅ふ西二個少も怖ふをう。虎
近く招きて言葉とせんと雜人們と制駐か。その所と退く。鬼角する間ふ
獸六郎と猛八いふ未ある。頃て朝夷タ馬の前ふ進ふ。未を朝夷ハ眼と止
ゆて緊と祝ふ。獸六郎ふ疑ひます。這ハ何うて此處へ未ア。嘗來き
よと問うけら。獸六郎ハ額着て是へ參モ。緣故ひうるぐの仔細ア。後
ふ寛ミと言ひ。まうそ體不恙き。もと見え奉つて夢との思
り。筒ふ風ふる上と。差りまび磐城ア。大難ふ遭クヒーとろ信偽り定
クふれりひと。粗虚言みあきうべ。と思ふてスレバ如何ふうやれひーと
心と痛ゆひうりとて朝夷も点頭いふも箇様で。思ひぞも放る城を
ちぬ衆くの人と斬害う。直ふその場で腹きんと。思ひふけとど鎌倉う
尉刀称のあん牙の上ふ。係るよりやあんじ。と思へば死ぬふも海死まし。先
簾舍人立帰りて。緯の顛末せえあげ。鬼も斯モタんと思ひて。証拠の為ふ
掲ゆる。半生半死の侍ども。雜人們ふ曳えき。磐城ともち出づるに覺
きふ人ふ。訴と哀ひ吾ふ告てり。吾們も卒土の瀆青木の人民う。昨日
大人が裁断みて。年來掠め取まる。田畠えの如く。うちの歓びと言ふ。そ
の夜磐城へ到る。宿アふ明る。と俟所ふ磐城刀称の館ふも。如此
の騒動あり。這ハ忠直う。朝夷大人と。附ひまんとあるう。事起まうと
人ふまう。その眞偽ふ知りと。思ふ磐城阿武隈以下。まこれ

世ふりへ酷吏を。人虎の如くふ怖き。蠅のぞく不陋あひされば。その風聞ふ
疑ひあひ。年未我意ふ募焉。民と虐げ財宝と。食貪とする所報ひ嗟
快きと。雀躍うて歎きゆ。虎狼ふそ一とりぐのう鎌倉の官
人あり。そきと殺して朝夷大人が。始終安穏うべきや。夫々國をもんじて
若辯わる彼人と。守護とそのを異と計らまく。思と知ぬ所あり。人か
もぞ此處ふ居アレ大人と俟うめいとの。然まとも當時の人情。信実あるを
心へ弛え。开ハ過分う心をえ。然あは汝達案内とせよ。と先ふ立て道を急
ぐ。渠等が親族遂来。昨夜の騒動早くもせえ。刈和沢の守護知縣を
朝夷大人と討伐。農夫们と逼催し。山を超て押すと。その風吹頗る
されば道を引ちて。羽の白沢へ赴き。然らば大事小及んで。告うりを
猶信せ。先づの所不足と注りて。其時世間の動静を探るふ。その所疑ひ
。と懾とえ不準備。其處ども立急とすと。秋の日影の短ううて。や
暮ふ及び。こそ汝があく未だ。所謂いふ氣遣。と問とて腰越獸六郎
かの荒河の渡口ふ。宿アリ。時うそ是まで。始末落り。物を。猛ハと。り合すべ。
朝夷馬とう跳て下す。猪ひ足下ひ及ぶ。岡田の冠者。が遺腹剛。若刀称を。ひ
し。不運みて民間ふ陥まひ。縁故。這田在下ふ遭ふ。遙この地裏ま
せ。不憶も大難ふ。逢ひ一夕。今具ふ。獸六郎とう。羨まし。好意。謝す。
ふ所。加施其夜の旅人。齋を。密書。不図足下。づふ入。とう。それ
就て。種う思ひ當まるとも。斯有じ早く祝。欲け。時ふ取ての急

朝夷七編卷五

勢ふあぐ。ひるかと飲食と断つとあまび勞どりん。伴ひ今宵山越の
準備ふ齋を割籠あり。是を食と凌ぎりと早せ。櫃うち把卸供え思
ふ。今日の宵闇を。路の程え覚束き。且く此處で休息う。足下ちが詰
説りゆべく。きのとも多くあり。去来者ども河を生す。芦を刈て圓座
ふうせ。また樹の枝と伐卸と。火と焚よとさ一示。以上を員百人可と思ひ
ありひふ四居して。割籠と用いりのものあり。朝夷猛ハ獸六郎の三個の中央ふ
坐とも坐。頃て過去行末の物語とを始ゆける。畢竟ちふ會合と。後ろ
顛未いふ。緯長けよと編と嗣卷と換て解んの。拙著と陋ある
ぞ。尊覧と愿ふりのう。

村田

村田

朝夷巡島記全傳第七編卷之五終

朝夷巡島記全傳

曲亭主人著

柳齋豊廣畫

北冊

同

第七編

松亭金水著

葛飾爲齋畫

五冊

同

第八編

全近刻出来

五冊

彫工師

京都 井上治兵衛
浪華 中澤太助

攝府書肆 河内屋太助

嘉永八乙卯歲春吉川

書

江戸日本橋南臺丁目

須原屋茂兵衛

江戸大傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

江戸日本橋通貳丁目

須原屋新兵衛

全馬喰町二丁目

菊屋幸三郎

京三条通御幸町角

吉野屋仁兵衛

大阪南本町心安橋通

河内屋平

全北久室寺町

河内屋源七郎

全唐物町

河内屋太助

肆

發行

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同二丁目

山城屋佐兵衛

同芝神明前

須原屋新兵衛

岡田屋嘉

七

同兩國横山町壹丁目

出雲寺萬治郎

同淺草茅町二丁目

須原屋伊

八

大坂心齋橋通北久寶寺町

河内屋源七郎板

書肆

